

指導資料

鹿児島県総合教育センター
令和2年10月発行

幼児教育 第21号

対象 幼稚園 小学校
校種 特別支援学校幼稚部



よりよい保育を展開するために ～幼児理解に基づいた評価を通して～

幼児理解に基づいた評価（H31.3文部科学省）には、幼稚園の教師が一人一人の幼児を理解し、適切な評価に基づいて保育を見直していくことが示されている。本稿では、幼児理解に基づいた評価を実施していく上での留意点等について実践事例を基に紹介する。

1 はじめに

幼稚園教育要領（H29.3文部科学省）には「幼児理解に基づいた評価」について、次のように示されている。

第1章 総則

第4 指導計画の作成と幼児理解に基づいた評価

4 幼児理解に基づいた評価の実施

幼児一人一人の発達理解に基づいた評価の実施に当たっては次の事項に配慮するものとする。

- (1) 指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること。その際、他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意すること。
- (2) 評価の妥当性や信頼性が高められる創意工夫を行い、組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、次年度又は小学校等にその内容が適切に引き継がれるようにすること。

各園においては保育を振り返り、保育日誌等に「活動のねらいや環境構成は適切であったか。」「幼児は遊びを楽しんでいたか。」などについて記録をしているであろう。記録を生かして幼児理解を深め、次の保育へ生かしていくためには、それを個別のものだけにせず職員間で共有したり、保護者と連携を図ったりすることが大切である。ここでは、教師が一人一人の幼児を理解し、適切な評価に基づいて保育を改善していくための基本的な考え方や方法などについて事例を基に示したい。

2 幼児理解と保育の評価

(1) 幼児理解について



教師は、一人一人の幼児と直接触れ合いながら、幼児の言動や表情から思いや考えなどを理解し受け止め、その幼児のよさや可能性を理解しようとするのが大切である。その際に、幼児が「何に興味をもってしているのか」、「何を実現しようとしているのか」、「何を感じているのか」を捉えることによって、幼児が発達に必要な経験を得るための環境の構成や、教師の関わり方も適切なものとなる。

(2) よりよい保育について

よりよい保育を展開するためには、

- ① 幼児を肯定的に見る。
- ② 活動の意味を理解する。
- ③ 発達する姿を捉える。
- ④ 集団と個の関係を捉える。



などのことを踏まえながら、一人一人の特性に応じた手立てを講じていくことが重要である。幼児は、一見すると同じような活動をしているようでも、その活動が一人一人の幼児の発達にとってもつ意味は異なる。教師は、幼児の感覚や気付きを受け止

め、環境を構成したり、教師の援助などを再検討したりしながら保育を振り返り見直すことが重要である。

(3) 保育における評価

幼稚園教育要領解説では、「評価は幼児の発達を理解と教師の指導改善という両面から行うことが大切である。」として、幼児の発達する姿を捉えることと、それに照らして教師の指導が適切であったかどうかを振り返り評価することの両面で行う必要があることを示している。評価の実施に当たっては、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすることが大切である。つまり、保育における評価を行うに当たっては、図1に示すとおり保育の中で幼児の姿がどのように変容しているかを捉えながら、そのような姿が生み出されてきた様々な状況について適切かどうかを検討し、保育をよりよいものに改善するための手掛かりを求める必要がある。

図1 保育のプロセスと振り返り評価

保育のプロセス	振り返りや評価
① 幼児の姿から、ねらいと内容の設定	・ あらかじめ教師が設定した指導に具体的なねらいや、内容は妥当なものであったか。
② ねらいと内容に基づいて環境の構成	・ 環境の構成はふさわしいものであったか。
③ 幼児が環境に関わって活動しようとする際の援助	・ 教師の関わり方は適切であったか。
④ 活動を通して幼児が発達に必要な経験を得ていくような適切な援助	

日々の保育と評価は常に一体になっているものであり、日常的なものといえる。長期的視点で幼児の姿の変容を捉え、指導の過程を振り返る際に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基に、幼児の発達の姿と教師の関わり方などについて「見落としている点はないか」、「一面的な捉えになっていないか」などを確かめる

ことで、次の保育を見直す手掛かりとなる。また、日々の記録やエピソードなどから幼児理解を深めたり、教師自身の思いや援助に気付いたりしながら保育を振り返り、改善していくことも必要である。さらに、複数の教職員でそれらを共有しながら、多面的に幼児を捉えることにより、保育の質の向上も期待できる。

3 幼児理解に基づいた評価の実践

(1) ポートフォリオの活用

ポートフォリオ図2は、個々の幼児の育ちや学びの総合的な記録と評価をまとめたものである。具体的には、幼児の活動のプロセスを写真や観察を通して記録し、文章を加えて整理する。そうすることで、幼児が何に関心を持ち、どのように活動しているか、思いや活動の意味を捉え、幼児が実現したいことを整理するとともに、自らの保育の振り返りや評価、さらなる育ちや学びを見直し、改善していくことにつながる。また、保護者理解を促し、保護者との連携を図る媒体としても機能する。ポートフォリオの事例を紹介する。

図2 ポートフォリオ例（W幼稚園）



これは5月に、一人一鉢で野菜の苗を植えた年長児の記録である。祖父母と野菜作りの経験があるA児は進んで野菜の世話に励んでいた。始めの頃は、一気に水を掛けていたA児

だったが、野菜の世話を繰り返していくうちに、変化が見られた。

【幼児と教師のやりとりの様子】

A児：水をかけては、手を止める。

教師：「どうしたの？」と声を掛ける。

A児：「土がお水を飲むまで待っているんだよ。」

A児：鉢の中に石を見付ける。

教師：「石だね。どうする？」と声を掛ける。

A児：「石は、野菜のお友達だからはしっこにおいておこう。」一度は手にした石を鉢の中に戻す。



【教師の留意点】

問い掛けで、A児の思いを引き出し、言葉で表出させながら、野菜や土の気持ちに寄り添うA児の姿を捉える。園での様子を保護者へ伝え、保護者からは家庭での様子を聞き取る。

本事例から次のようなことが読み取れる。当初、野菜に一気に水を掛けていたA児が、鉢から水が溢れ出ないような水の掛け方に気づき、それを実際に試したり、鉢の底に敷いた石を想起して行動したりなど、経験を重ね、それを取り込みながら活動したり、自分の考えを伝えたりする姿へと変化することが捉えられる。また、「もの」へ愛着をもって関わり大切にしようとする気持ちが育まれていることも捉えられる。

その後、「野菜の葉に直接水がかからないように気を付けよう。」など、友達へアドバイスをする姿も見られ、家庭での経験を園での活動に生かそうとする姿も捉えられている。これは、教師がその瞬間の幼児の言動の意味を見逃さず幼児の思いを引き出し、行動に共感し、継続的な観察と記録を通して幼児のよさや成長に気付いている事例である。このように、幼児が目的に向かって、どのような活動を展開し、気づきや考えが生まれているかなど活動の意味を捉えることが重要である。また、幼児の思いを引き出す問いかけで、幼児が自分なりの言葉で表現できるようにしたり、幼児の気持ちを受

け止め共感の姿勢を示したりすることを大切にしたい。そして、幼児の様子を保護者に伝え、園と家庭での経験をつないだり、成長を共有したりすることも大事にしたい。このような取組を通して、幼児の育ちの方向を捉え、今後どのような経験をさせていくかなどについて教師自身が考え、明日への保育を見通したり、関わりを見直したりなど保育を振り返り、改善につなげていくことができる。

(2) エピソードの活用

園内研修などにおいて、エピソードを活用し「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基に、幼児の育ちを多面的に捉えて共有したり、保育者の関わりや保育の工夫について話し合ったりすることができる。次の事例は、エピソードを基に、「幼児のどんな姿が捉えられるか。」「教師はどのような援助を行っているか。」について職員間で話し合いをもつものである。

エピソード【ある日の年中児（4月）の様子】

入園後一度も声を発していないA児が、ある日折り紙でかぶとを折って教師に見せに来た。それを教師がバッジ風に胸に付けてみると「ぼくもほしい。」とB児が興味を示した。そこで教師は「Aちゃんに教えてもらってごらん。」とB児に声を掛ける。・・・略・・・「どこまで折るの？」というB児の問いに対してA児の返事はないが、B児が折る様子を見て折れたことを確認してから、次に進もうとする姿が見られた。

【翌日の幼児の様子】



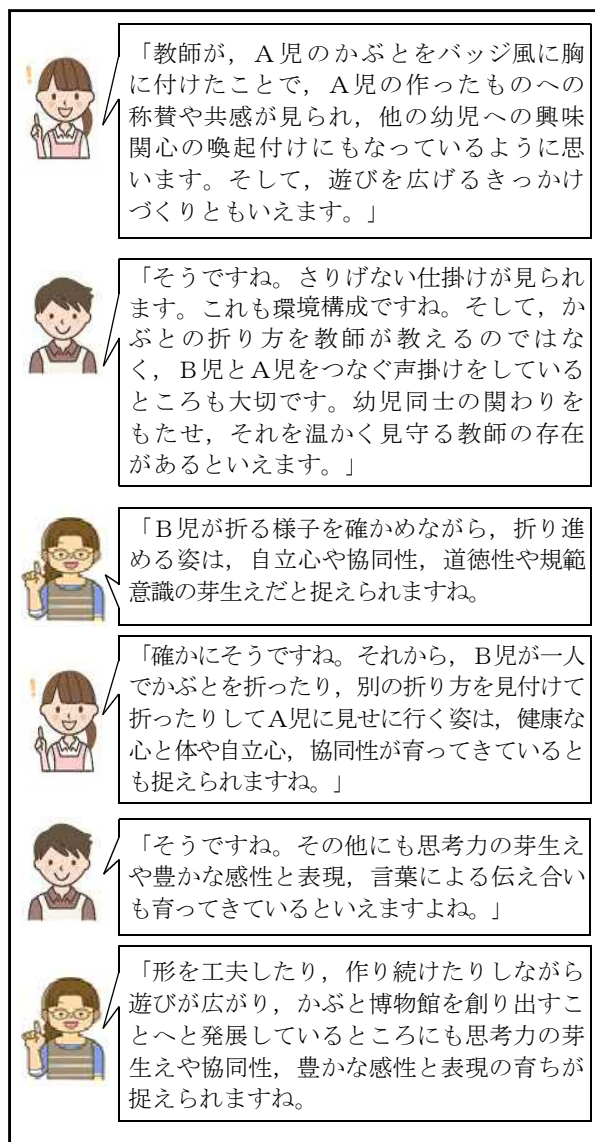
A児に教えてもらったかぶとを一人で折り始めたB児。かぶとができると真っ先にA児に見せに行く。自分が折れた喜びを、伝えたかったのだろう。A児は、B児の話を静かに聞いていた。

【数日後の幼児の様子】

B児は、新しい別のかぶとの折り方を見つけた。そして、そのかぶとをA児にプレゼントしていた。そのことをきっかけに、様々な折り方で折ったかぶとを展示する二人の「かぶと博物館」が始まった。A児からの言葉はないが、二人で楽しそうに創り上げていく様子が見られた。

(H30.7 初等教育資料 幼児教育事例より引用)

〔職員間でのやりとりの様子例〕



「教師が、A児のかぶとをバッジ風に胸に付けたことで、A児の作ったものへの称賛や共感が見られ、他の幼児への興味関心の喚起付けにもなっているように思います。そして、遊びを広げるきっかけづくりともいえます。」

「そうですね。さりげない仕掛けが見られます。これも環境構成ですね。そして、かぶとの折り方を教師が教えるのではなく、B児とA児をつなぐ声掛けをしているところも大切です。幼児同士の関わりをもたせ、それを温かく見守る教師の存在があるといえます。」

「B児が折る様子を確認しながら、折り進める姿は、自立心や協同性、道徳性や規範意識の芽生えだと捉えられますね。」

「確かにそうですね。それから、B児が一人でかぶとを折ったり、別の折り方を見つけて折ったりしてA児に見せに行く姿は、健康な心と体や自立心、協同性が育ってきているとも捉えられますね。」

「そうですね。その他にも思考力の芽生えや豊かな感性と表現、言葉による伝え合いも育ってきているといえますよね。」

「形を工夫したり、作り続けたりしながら遊びが広がり、かぶと博物館を創り出すことへと発展しているところにも思考力の芽生えや協同性、豊かな感性と表現の育ちが捉えられますね。」

この事例からは、教師がA児に対して焦らず丁寧に気持ちに寄り添う姿やA児の得意なことを発見し、それを媒介にB児とイメージを共有し関わりをもてるような架け橋になっていることが分かる。そのことによって、幼児が興味を共有し、工夫しながらかぶと博物館へと遊びを広げていく姿が捉えられる。幼児期には、言葉で伝えることが難しい場面もある。この事例のように、言葉は交わさなくても相手の気持ちを感じ取り、共に遊びを楽しむことで通じ合うことができる。教師は、言葉で表現しにくい幼児の気持ちをくみ取り、物を介して通じ合うような援助を工夫していくことも大切である。

このように、エピソードを基に自らの保育の在り方を問い直したり、教師間で情報を共有したりしながら育てたい姿を明確にし、保育の方向性と留意点を意識していきたい。そうした取組により、自分の見方を広げ、多面的に幼児の気持ちや行動の意味を理解していくことにつながり、保育の質の向上と改善を図っていくことが可能となる。

4 おわりに

教師は、遊びの中で幼児が発達していく姿を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を念頭に置いて捉え、一人一人の発達に必要な体験が得られるような状況をつくったり必要な援助を行ったりするなど、指導を行う際に考慮することが求められている。それぞれの幼児のよさや行動の意味を捉えてそれを生かしていくことや一人一人の幼児が十分に自己を発揮しながら望ましい方向に伸びていくために、幼児理解に基づいた評価がとても大切といえる。

各園の実態を踏まえながら、幼児理解に基づいた評価が実施され、さらに、よりよい保育が展開されていくことを期待したい。

－引用・参考文献－

- 幼稚園教育要領（平成29年）文部科学省
- 幼稚園教育要領解説（平成30年）文部科学省
- 幼児理解に基づいた評価（平成31年）
文部科学省
- 初等教育資料（平成30年7月号）東洋館出版社
- 幼児教育指導者養成研修資料（平成30年、令和元年）文部科学省
- 子どもと保育者でつくる育ちの記録
北野 幸子監修・署 日本標準
- 幼稚園教育要領ハンドブック 無藤 隆 Gakken
（教職研修課 田子山 ゆかり）